

アメリカ先住民であるということ

——エリザベス・ウォーレンの人種アイデンティティをめぐる葛藤

石山 徳子

はじめに

- 1 セトラー・コロニアリズムと先住民族の人種アイデンティティ
- 2 自称チェロキー族の増加
- 3 大統領選挙とエリザベス・ウォーレンの人種論争
- 4 家族史と DNA 鑑定
- 5 先住民族からの反論
- 6 人種論争に内在する構造的暴力

おわりに

はじめに

2020年におこなわれた国勢調査によると、この10年間でアメリカ先住民族の人口は大きく増加した。自分の人種について、先住民族のみにチェックをつけた人は370万人にのぼり、これはアメリカ合衆国（以下、アメリカ）の人口の1.1パーセントにあたる。2010年の調査における290万人から、27.6パーセントも増加していることになる。さらに注目すべきは、他の人種に加えて先住民族にもチェックした人数を含めると、10年前の520万人から、全人口の2.9パーセントにあたる970万人に激増していることだ。

首都ワシントンDCを拠点とする先住民族の全国組織である、アメリカインディアン国民会議(NCAI)のフォーン・シャープ会長は、この結果について、アメリカ社会の多様性を反映するものである、と前向きに受け止める声明を出した(National Congress of American Indians, 2021)。しかし、調査結果の背景には、「多様性」という言葉で片付けるには、あまりに複雑な歴史的、文化的な文脈がある。したがって、先住民族の人種アイデンティティの形成と、アメリカ社会の多様化との関連については、より慎重な議論が必要だ。

2021年8月19日のCNN報道は、急激な増加の理由について、国勢調査への協力を求めるアウトリーチの効果だけでなく、ほかにもさまざまな要因があり説明は困難だ、と論じている。たしかに、「多様性」がキーワードのひとつであることは間違いない。たとえば、先住民族にチェックをつけた人の30パーセント近くは、ラティーノだった。ラティーノのなかには、移民として離れた出身国における、先住民族のアイデンティティを有している人が含まれている。つまり中南米の先

住民族にルーツを持つ人たちが、「アメリカ先住民」であると申請するケースが多かったと考えられる。CNN 報道はこれに加えて、先住民族が所有していた黒人奴隷の子孫で、部族員登録が阻まれてきた人がみずからの先住民性を主張するケースや、エキゾチック、おもしろい、などという理由で自分は先住民だと申請した人がいた、という分析を紹介している (Chavez and Kaur, 2021)。

さらに興味深い指摘をおこなっているのが、8月28日のNPR報道だ。これによると、自宅で手軽におこなえる安価なDNA検査キットの流通が、今回の調査結果に影響している。DNAを調べたうえで、自分のルーツには先住民族が含まれている、と主張したがる人が増えている、というのだ (Wang, 2021)。筆者が2021年11月時点でおこなったインターネット検索によれば、23andMeでは79ドル、Ancestry.comでは59ドル、MyHeritageでは47ドルのキャンペーン価格で、DNA検査が可能だ⁽¹⁾。自宅に送られてくる簡易キットを使い、頬の裏側をこすり、これを会社に返送すれば、数週間で鑑定結果が届く、という仕組みだ。基本料金では、先祖の人種や民族に関する情報、さらにいくらか足せば疾病に関する遺伝情報の提供も受けることができる。家族のルーツ、疾病や健康に関する遺伝子レベルの情報入手が可能となり、また膨大なデータベースから、血のつながりのある新たな親族が出現するケースも多い。サービスを利用する消費者が増えたことで、新たに先住民族を名乗る人が現れた、というのがNPRの主張である。

また近年、先住民族の人種アイデンティティをみずから主張する人物が続出し、その信憑性について疑義を唱えられるケースが、アメリカやカナダの政界、学界、文学界、映画界などで多発している⁽²⁾。国勢調査が示す傾向とも重なるこうした現象には、セトラー・コロニアリズムの国に生きる先住民族の立ち位置と、彼らの人種アイデンティティをめぐる文化表象、政治経済的不平等、そして社会正義の問題が絡んでいる。

そこで本稿では、2016年のアメリカ大統領選挙における民主党候補者のひとりで、チェロキー族の血筋を引いていると主張していた、エリザベス・ウォーレン上院議員の人種をめぐる論争に焦点を当てて、以下の問いについて検討する。1) 誰が、いかなる基準で「先住民」を規定し、その人種化はセトラー・コロニアリズムに根ざした国家で、どのような意味を持つのか。2) 先住民族、とくにチェロキー族のルーツを自称する人口が増加しているのはなぜか。3) DNA鑑定で先住民と判定された人物は、先住民といえるのか。4) チェロキー・ネーションや多くの先住民研究者が、ウォーレンの動きを懸念したのはなぜか。

本稿ではまず、先住民研究、エスニック研究、歴史学などの領域で蓄積されてきた先行研究をも

(1) DNA検査による人種規定に潜む倫理的、社会的課題については、人類学者サラ・エイブルが、本稿が目にするエリザベス・ウォーレンの一件や、ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアのDNA検査結果を含む、複数の事象に言及し、考察している。DNAを調べることによって得られる知見の限界や矛盾について、科学的見地、DNA検査市場のあり方、倫理的な側面にも目を向けながら検討している (Abel, 2019)。

(2) チェロキー族女性として、先住民研究とエスニック研究の領域で、多数の著作と論文を世に出すだけでなく、運動家としても精力的な活動をしてきた、アンドレア・スミスの人種アイデンティティ詐称問題については、石山 (2016) で検討をおこなった。2021年、『ニューヨーク・タイムズ』は特集を組み、長年にわたる多数の関係者への取材と、詳細な資料調査の結果を報じた。スミスには先住民族のルーツは見当たらず、白人であることをあきらかにする内容だった (Whelan, 2021)。スミスは、先住民女性であることを前面に出して、重要な仕事をしてきた人物であり、学界における衝撃のみならず、社会的なインパクトも極めて大きい。文学界ではカナダの有名な小説家であるジョセフ・ボイデン、映画界においてはジョニー・デップの例などが挙げられる。

とに、先住民族に関する人種論の系譜について、セトラー・コロニアリズムの歴史的な文脈に結び付けながら整理する。これを踏まえて、先住民を「演じる」人びとの存在、なかでも自称チェロキー族が増加しているという、現代アメリカの社会事象について説明する。そのうえで、ウォーレンの人種に関する論争の経緯を振り返る。さらに、DNAが人種を規定するという主張に潜む、セトラー・コロニアリズムの思想と構造について、ウォーレンの事例に焦点を当てて検証する。最後に、先住民族が時空を超えて育んできた、土地、先祖や子孫、キンシップと共同体、さらには周囲の事物や存在との関係性を軸にした先住民性、これに根ざした人種論の可能性について考える。とくに、個別の要素が強いアイデンティティという概念から脱却し、co-becoming（ともになっていく）というプロセスに、先住民族の人種に関する思考を転換していく方向性を提起したい。

1 セトラー・コロニアリズムと先住民族の人種アイデンティティ

先住民族の人種アイデンティティを論じるための大前提として、人種とは社会の営みのなかでつくられていく概念であることを、まずは確認しておきたい。マイケル・オミとホワード・ワインアントは、共著 *Racial Formation in the United States* (『アメリカ合衆国における人種形成』) で、人種とは必ずしも生物学的なものではなく、歴史的、政治的な構築物であることを示した。1986年初版の本書は、人種に関する分析の方向性を根本的に転換した、いまや古典とも目される重要な研究である。

約30年後の2015年に出版された第3版には、大幅な加筆修正が加えられた。ここで著者たちは、先住民族の人種アイデンティティに関して、セトラー・コロニアリズム論や部族主権との関わりに言及している (Omi and Winant, 2015)。2012年にはこの著作を踏まえて、領域を横断する23人の人種研究の専門家が *Racial Formation in the Twenty First Century* (『21世紀における人種形成』) に寄稿した。ここには、先住民研究の理論化に重要な貢献をしてきたアンドレア・スミスによる「先住民性、セトラー・コロニアリズム、白人至上主義」と題された論考などが含まれている (Smith, 2012)⁽³⁾。スミスが挙げた3つのキーワードは、批判的人種研究の領域において、先住民族の人種アイデンティティを論じるうえで欠かせない。つまり、これについては、他の人種・民族グループとは異なる概念的枠組みにおきながら、植民地主義の構造分析と結び付けて考える必要があるのだ。

植民地主義の歴史と思想に関しては、さまざまな議論の蓄積があるが、とくにここでは、入植者植民地主義、もしくは定住型植民地主義とも訳される、セトラー・コロニアリズムの系譜に着目する。すなわちそれは、新しく到来した入植者による支配が、先住民族の存在と、土地にたいする権利を構造的に排除し、また抹消していくプロセスである。そして、アメリカという超大国の成り立ちの根幹には、セトラー・コロニアリズムの思想と構造が根を張っている。

(3) 注(2)で示したように、スミス自身が主張するチェロキー族の出自がおそらく虚偽であるという現実、先住民研究、そしてエスニック研究の領域全体にとって、極めて不幸なことである。自身のアイデンティティの虚偽性について、研究者としての倫理が厳しく問われるべきであるが、すぐれた理論家であるスミスによる本論考の内容には、画期的な論点が数多く含まれている。

アメリカは、ヨーロッパから入植した人びとが、彼らにとっての新天地に住みつき、新しく創設した国家だ。しかし、国内外で多くの人びとが無批判に受け入れてきた、自由、平等、民主主義を希求する「移民の国」という概念については、セトラー・コロニアリズムの問題意識からするならば、批判的な検討が必要である (Dunbar-Ortiz, 2021; 石山, 2020)。歴史家パトリック・ウルフが論じたように、入植者は宗主国には戻らず、新しい土地に留まった。セトラー・コロニアリズムにもとづく侵略とは「事象ではなく、構造」であり、先住民族の抹消が必然だった (Wolfe, 2006, 388) ⁽⁴⁾。入植者とその子孫は、アメリカ大陸に何世代ものあいだ生活していた先住民族の土地を収奪し、それぞれの場所に息づいていた共同体、育まれてきたさまざまなつながり、関係性を壊滅するプロセスを経て、超大国を創り上げたのである。

このような文脈で創設された連邦政府は、強制移住政策と同化政策を進めていくなかで、先住民族の文化的、民族的アイデンティティについても、抹消と破壊の方向へと導いた。ダコタ先住民の人類学者キム・トールベアーは、18世紀から20世紀にかけてつくられた人種の分類法とは、植民地主義支配の文脈において創出されたものである、と論じた。彼女はこの分析を、人種に関する科学思想、血筋やその割合などによる人種規定の歴史、現代のDNA鑑定にいたる関連性を検証する作業を通じておこなった (TallBear, 2013, 31-66)。たしかに中立的、客観的な科学的事実とされる人種規定は、あくまでも入植者側の論理にもとづいている。

誰が先住民なのか、というアイデンティティの問題は、土地にたいする権利、そして先住民族の主権の問題とも深く絡んでいる。生物学的、文化的、民俗的な集合体であるのみならず、政治的、法的な集合体としても機能する先住民族が、苛烈なジェノサイドを生き延びていくために、土地に根ざしたアイデンティティと主権を守る必要があったからだ。これは、先住民族が主体として構築してきた、「先住民性」にも連なるものだ。トールベアーは、気鋭の先住民研究者たちがまとめた、*Native Studies Keywords* (『先住民研究のキーワード』) に寄せた、先住民性に関する論考で、先住民族とは生物学的、文化的、政治的な集合体であると論じた。そして彼女は、先住民族が先祖から受け継ぎ、また子孫に残していく先住民性とは、単に遺伝学的につながっているというだけでなく、「生きている景観」との相互的な関係性のなかで育まれていくものであることをあきらかにした (TallBear, 2015, 131)。時代を超えて、つねに変化の途上にある土地、人間、そのほかの生き物や事物との親密な関係からなるキンシップ、これらを包括的に捉える共同体、その歴史経験によって培われてきた先住民性は、入植者が主導する国家の論理が優先される人種カテゴリーと、それに根ざしたアイデンティティとは、発想の起点から異なっている。

入植者が創設した国家としては、発展の基盤になる土地の収奪のためには、先住民族の存在そのもの、そしてアイデンティティの抹消が必然だった。領土拡張の19世紀において、先住民族は

(4) セトラー・コロニアリズムの構造について、白人対先住民族といった単純な二項対立の枠組みから脱却し、より多様なアクターによる複雑な葛藤に着目した研究も多くある。ヨーロッパ系の入植者、たとえば中南米系やアジア系を含む有色人種の入植者、そして先住民族との関わりについての問題提起も重要だ (Glenn, 2015; Pulido, 2018; Saldaña-Portillo, 2016)。さらに、ジェンダーとセクシュアリティとの関連については、Barker (2017) を参照。西谷修による、「無主の地」を「法的所有」の対象としながら、征服と植民によって拡大したアメリカの「制度空間」の分析もまた、セトラー・コロニアリズムの理論と通じるところが多い (西谷, 2016)。

ヨーロッパ系の入植者には価値がないとみなされた辺境へと追われ、従わぬ場合は虐殺の対象になった。さらに、寄宿学校制度を含む過酷な同化政策とは、「野蛮人」を「文明化」する戦略だった。こうして、先住民族とみずからを捉える人口が激減し、かわりに入植者や、彼らに同化した人口が増えることは、結局のところ白人が所有する土地の増加と、彼らによる支配体制の強化につながったのである。

このプロセスは、奴隷制のもとで白人の財産を増やすために、一滴でも黒人の血が入っていれば黒人とみなす、というワン・ドロップ・ルールが用いられた人種分類法とは対照的だった。たとえば、先住民と黒人のあいだに生まれた子どもは、黒人とみなされるという規定のもとに、先住民族が消滅への道をたどるいっぽうで、白人の財産である奴隷は増えた。こうした人種規定は結果的に、ヨーロッパ系の入植者とその子孫による支配構造を強化したのだ（石山，2020，15-16；Wolfe, 2016, 8）。白人至上主義の思想、先住民族にたいする身体的、および文化的なジェノサイド、黒人奴隷制と、現代にいたるまで根深く存在する人種規定の方法のあいだには、密接な相互関係がある⁽⁵⁾。

先住民族の人種論に関するもうひとつの重要な流れが、入植者によるアメリカ人のアイデンティティの模索と、先住民性への欲望の歴史である。1999年にフィリップ・デロリアが出版した著作、*Playing Indian*（『インディアンを演じるということ』）は、古くは植民地の住人たちが、先住民の格好をしてお茶を海に投げ捨てたボストン茶会事件から、現代にまでいたるキャンプファイヤーやボーイスカウトの伝統などに言及しながら、白人が先住民を「演じる」文化と、その歴史的系譜をあきらかにした。先住民を「演じる」行為を通じて、白人はそのアイデンティティと、みずからを重ね合わせる、または「野蛮性」を他者化し、自分たちのアメリカ人としてのアイデンティティを再定義してきた、という議論である（Deloria, 1998）。シャーリー・ハンドーフもまた、ワールド・フェアや映画などを事例に、ヨーロッパ系アメリカ人による先住民の文化表象とアイデンティティの盗用の歴史について論じた（Hundorf, 2001）。

そして、ジョアン・バーカーの研究は、先住民族の側もまた、みずからの真正性を示すために、外見や行動を構築していることと、その法的な権利獲得への影響についてあきらかにしている（Barker, 2011）。また彼女は、マルチカルチュラリズムが称揚されるリベラルな社会のファッション、映画、音楽、そして政治の世界が、コスチューム化された先住民性を生産するいっぽうで、統治、領土、文化にたいする諸権利、主権や自決権に連なる先住民性が軽視されてきた、という重要な指摘もおこなった（Barker, 2017, 2-3）。

たしかに、先住民を「演じる」行為は抽象的な文化表象の域にとどまらず、政治経済的な権利や利益の問題にも波及する。たとえば、ダリル・ルローによる研究は、先祖に先住民族のルーツが含まれていると主張するフランス系カナダ人が、ケベックで実際に先住民族の団体を創設し、経済利益を得ている現状を批判的に検証した。この研究は、白人の特権、および白人至上主義と、先住民

(5) 紙幅の関係上、ここで詳しく論じることはできないが、先住民族の主権と、奴隷制のもとで労働、身体そのものを搾取されつづけた黒人の土地にたいする権利の問題、さらには先住民族と黒人の人種アイデンティティに関する複雑で、ときには対立をもはらむポリティックスと歴史的系譜については、その交差を検討する研究が増えている（Ben-zvi, 2007, 2018; Day, 2015; King, Navarro, Smith, 2020; Roberts, 2021; Wilderson III, 2010）。

族のアイデンティティの盗用の関連についてあきらかにしている (Leroux, 2019)。ルローの研究が取り上げたのはカナダの事例だが、これは北米大陸のセトラー・コロニアルな空間で展開する共通の社会事象であり、支配構造は通底している。

以上の既存研究が示すように、先住民族の人種アイデンティティの構築、入植者とその子孫が先住民を「演じる」という伝統、これに抗う先住民族の経験、彼らが守り抜いてきた諸権利と先住民性ととのせめぎ合いは、複雑なプロセスを経て現在にいたっている。そして、これにまつわるセトラー・コロニアリズムに根ざした歴史的な文脈は、本稿が着目するエリザベス・ウォーレンの人種論争にも一貫している。

2 自称チェロキー族の増加

先住民を「演じる」人たちのなかでもとくに目立つのが、ウォーレンを含む、自称チェロキー族である。人類学者サーシ・スタームは、著書 *Becoming Indian: The Struggle over Cherokee Identity in the Twenty-first Century* (『インディアンになるということ：21世紀におけるチェロキーのアイデンティティをめぐる葛藤』) で、1970年代以降、国勢調査で先住民のアイデンティティ、とくにチェロキー族の子孫であると主張する人口が急増している現象について分析した (Sterm, 2011)。もともとは他の人種アイデンティティを有し、なんらかの理由で自分は先住民族の子孫である主張するようになった人びとのことを、スタームは Race Shifter (以下 RS)、すなわち人種変更者と名付け、社会的、政治経済的、文化的な背景を考察した。

スタームによれば、RSのあいだでも、とくにチェロキー族の血を引いていると主張する人の割合は、他のどの部族よりも高い。そして自称チェロキー族の共同体は、南西部をはじめとする全米各地に、約250も存在している。なかには、連邦政府の承認を受けることはできなくても、州政府による承認を受けているコミュニティも複数含まれる。スタームは、チェロキー族を名乗るRSが多い理由として、1) チェロキー族は白人の文明規範を受け入れているという評価のもとに、「文明化した5部族」と捉えられた部族のひとつである。したがって、「文明化した」先住民族を名乗ることが、白人には魅力的である、2) 部族外人口との結婚の割合が高く、多くのチェロキー族の子孫が白人に見える、3) 最大規模を誇るチェロキー・ネーションの場合、部族員登録に関する血筋の割合の規定がなく、ほんの少しでも血のつながりを証明できれば登録が認められるため、一般的にチェロキー族の大半は白人に見えるのが当然だと考えられるようになった、という3点を挙げている (Sterm, 2011, 16)。

たとえば、チェロキー・ネーションの部族員資格審査に係図学者として30年以上も携わってきたデイビッド・コーンシルクによれば、同ネーションの血筋の割合は、フル・ブラッドから1/8,192にいたるまで幅広い (Corn silk, 2015)。ノース・カロライナ州のイースタン・バンド・オブ・チェロキー・インディアンズの登録条件にあたる血筋の割合の規定は、1/16で、これも、かなり緩い規定だ。これにたいしてチェロキー・ネーションと同じオクラホマ州のユナイテッド・キトワ・バンド・オブ・チェロキー・インディアンズは1/4の規定を維持しており、他のふたつの部族とは様相が異なる (Sterm, 2011, 131-132)。

ウォーレンの事例を検証する際に、スタームの研究における以下の2点はとくに重要である。すなわち、RS現象について白人の特権として捉える観点、そして連邦承認を受けているチェロキー3部族のいずれもが、RSの存在をみずからの存続と主権を脅かすものとして受け止めている、という研究結果だ。とりわけ重要なのが、先住民族として記号化されない身体と外見のおかげで、大半のRSは、自分の人種アイデンティティを「選択」することができる、すなわち白人の特権を有しているという指摘だ⁽⁶⁾。

先住民族の血筋を主張する欲望は、アメリカに生きる黒人のあいだにも存在している。アフリカ系アメリカ人研究の大家であるヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアは、2014年12月に出版したエッセイで、自身の家族に伝わる、チェロキー族の血筋を引いているという物語に言及した。地理的な要素を考慮に入れるならば、この話には無理があるのではないかと叔父に問うと、「それならイロコイ族かもしれない」という気軽な返答があった。そして、ゲイツが受けたDNA鑑定の結果は、ヨーロッパ人50.5%、サハラ以南のアフリカ人48.2%、アメリカ先住民0.8%というものだった。先住民の血筋があまりに薄いことに衝撃を受けた親戚から、鑑定結果の公表を非難する内容のメッセージが大量に届いたという。

ゲイツはDNA鑑定結果に関して、なぜヨーロッパ人の血筋を多く受け継いでいることに関しては誰も触れないのに、先住民の血筋にこだわるのだろうか、と問う。彼の分析は明快だ。白人の血を多く引いている背景には、奴隷制以来の苛烈な性暴力の歴史がある。レイプから生まれた身体を受け継いでいるという現実が、あまりにも痛ましいがために、黒人は先住民の血を引いているというファンタジーに救いを求める、というのだ(Gates Jr., 2014)。このように、先住民族のDNA、血筋、人種は、アメリカに根ざしたセトラー・コロニアリズムと、奴隷制の歴史と絡み合いながら、複雑なアイデンティティ・ポリティックスを構築してきた。

以上で論述した歴史と、思想的な流れに目を向けながら、エリザベス・ウォーレンの人種をめぐる論争について、考察していきたい。

3 大統領選挙とエリザベス・ウォーレンの人種論争

2018年秋、マサチューセッツ州選出のエリザベス・ウォーレン上院議員の人種アイデンティティが、大統領選挙を背景にした政治論争の的になった。当時の大統領、ドナルド・トランプが、自分はチェロキー族の子孫である、というウォーレンの主張に疑問を呈したのがきっかけだった。人種やジェンダーによる差別発言を乱発していた彼は、彼女を「ポカホンタス」と揶揄し、挑発した。白人男性ジョン・スミスの助命を嘆願した、健気なプリンセスという表象、そして彼らのあいだのロマンスは、ディズニー映画のテーマにもなった。しかしこれは、ポウハタン族の領土に侵略した

(6) ただしこれについては、先住民族による黒人奴隷制の歴史に着目するならば、さらに複雑な問題が浮き彫りにされる(佐藤, 2005)。注(5)とも重なるが、チェロキー族を含む南東部にルーツを有する先住民族は奴隷制の歴史を抱えており、黒人のルーツを持つ先住民の部族員資格が剥奪されたケースもある。たとえば、King, Navarro, Smith (2020)に収められた複数の論考は、白人至上主義に根ざした入植者国家において、先住民族のあいだにも形成された黒人差別の思想、対立と排除の系譜について検証している。

入植者本位の、つくり話であることは間違いない。性暴力の被害者であり、ヨーロッパで不遇の生涯を終えた実在の先住民女性の経歴とは、あきらかに異なっている。トランプは、ポカホンタスにまつわる歪んだイメージを使って、政敵ウォーレンを攻撃したのである。

もともとトランプは、特定の先住民族の人種アイデンティティに関して、懐疑的な立場をとっていた。それは、自身のカジノ事業との関わりにも起因していた。彼は1993年、ニュージャージー州のアトランティック・シティを拠点としたカジノ事業の競合相手となる先住民族について、「居留地を創設しようとしているインディアンの大半よりも、わたしの方がインディアンの血筋を引いているかもしれない。……わたしには、彼らはインディアンには見えない」と言い放った (Gonzales and Kertész, 2020, 32)。主権を有する先住民族について、アイデンティティの真正性そのものに、疑義を呈したのである。したがって、トランプによるウォーレンへの攻撃の裏には、先住民族にたいする幾重にも絡んだ差別思想、さらには部族が守りつづけてきた主権、および経済的な台頭の可能性にたいする嫌悪感が横たわっていた。そして、彼による「インディアン」の定義や基準は、表面的な見た目、もしくは血筋のみに依拠していた。

いっぽうのウォーレンは30年以上にわたり、アメリカ先住民、とくにチェロキー族、およびデラウェア族の子孫であると主張していた。2019年2月に『ワシントン・ポスト』が公開した、ウォーレン自身が1986年に記入したとされるテキサス州の弁護士登録用のカードには、人種の欄にアメリカン・インディアンと記載されている (Linskey and Gardner, 2019)。また彼女は1996年にいたるまで、アメリカ・ロースクール協会の名簿に、「マイノリティ」として登録をつづけた。

有能な法学者であるウォーレンは、1977年に教職について以降着々とキャリアを蓄積し、ヒューストン大学を経て、テキサス大学オースティン校で教職についた。その後さらに活躍の場を広げ、1987年にはペンシルバニア大学、1995年にはハーバード大学のロースクールで教鞭をとるにいたる。『ボストン・グローブ』は2018年9月、先住民のアイデンティティが転職に有利にはたらいた事実はなく、転職に関わった全員が、彼女を白人と認識していた、という調査結果を発表した。この間の同僚や、人事に関わった100人以上に聞き取りをおこなったという (Linskey, 2018a)。

エリザベス・ウォーレンは先住民なのか、そうではないのか。政治家の人種アイデンティティとその出自が、大手のメディアも巻き込んだ論争へと発展した背景には、2000年代以降の政治と社会情勢を反映している。実は、1993年から2期にわたり大統領を務めた、ウォーレンと同じく民主党のウィリアム・クリントンもまた、先住民族のルーツについて言及していた。スポケン族出身の作家、シャーマン・アレクシーと在職中の1998年におこなった対談で、「私の祖母はチェロキーのクォーターだった」と、彼が述べたこともあった。その主張には、ウォーレンと同様、家族に伝わる物語的な意味以上のものはないのだが、当時のクリントンが表立って批判されることは、ほとんどなかった (Wilkinson, 2019)。

それではなぜ、ウォーレンの人種アイデンティティに関して激しい論争が生まれ、これが大々的に報じられたのだろうか。それは近年、先住民族とは何か、誰がどのような文脈で決めるのか、という問題が、当事者である先住民族、とくに部族政府によって批判的に問われるようになり、また前述したように、先住民族に関する批判的人種論や先住民性について、学界でも活発に議論されているからだろう。さらに、カジノ産業などの発展により、先住民族のアイデンティティが教育福祉

面におけるメリットのみならず、大きな経済利益につながる場合がある、という社会状況も作用していると考えられる⁽⁷⁾。

そしてトランプは、ウォーレンへの挑発をつづけた。彼は2018年7月5日、モンタナ州でおこなわれた集会で、もしもDNA鑑定によって、彼女が先住民であることが証明されるならば、100万ドルを希望の慈善団体に寄付する、と大見得を切った。これを受けてウォーレンは、DNA鑑定を受けて自身の主張を証明する、という選択をした。先住民族としての人種アイデンティティを、遺伝情報によって定義しようとするトランプ、そしてこれによってみずからの先住民性を正当化しようとするウォーレン、皮肉なことに、敵対するふたりの政治家の思考方法は酷似していた。セトラ・コロニアリズムの国において存在を不可視化され、声を消されてきた先住民族にとっては、自分たちを無視した一方的な人種規定こそが侮辱であることに、ウォーレンもまた、気づいていなかったのである。

4 家族史とDNA鑑定

ウォーレンは2018年秋、大統領選挙に向けて作成した約5分半のPR動画を公表した。同年10月15日付の『ワシントン・ポスト』のオンライン記事で確認することができる動画は、彼女をポカホントスと呼び、攻撃するトランプの声をバックに、故郷のオクラホマ州ノーマンに帰省するウォーレンが映し出されるシーンから始まる(Wang and Paul, 2018)。その後、3人の兄をはじめとする家族が登場し、ウォーレンの人種アイデンティティに関するトランプの主張にたいして、口々に反論する。

ウォーレン自身が披露する家族史とは、次のようなものだ。20歳だった父親は、1歳下の、彼女の母親となる女性に一目惚れした。ところが彼の両親は、彼女の家系に先住民族の血が流れているという理由で、結婚に猛反対した。当時、このような差別は日常的だったが、愛を貫いたふたりは結婚し、4人の子どもに恵まれた。動画では次に、弁護士、大学教員としてのキャリアについて解説がなされる。ウォーレンの実力を讃えるかつての同僚や教え子の証言を交えながら、彼女が自分のキャリア形成に、先住民族としての出自を利用したことはない、という主張が繰り返される。

動画のクライマックスともいえるのが、DNA鑑定結果の公表である。DNA鑑定は、彼女は1/64～1/1,024の割合で先住民族の血を引いている、という結論を示した。これはすなわち、5世代から6世代前の先祖に、先住民族が含まれているということを意味していた(Linskey, 2018b)。動画上でウォーレンは、鑑定を依頼したスタンフォード大学医学部の生化学研究者、カルロス・D・ブスタマンテに電話をかける。ウォーレンは、Ancestry.comや23andMeの顧問を務めてきたDNA鑑定の権威に、「大統領は私の母を嘘つきだと言っている。事実は何か?」とたずねる。するとブスタマンテは、「事実とは、あなたの家系にはアメリカ先住民族の先祖がいるということだ」と断言する。これをきいた彼女は、満足げに微笑み、頷くのである。

彼女は、自分は部族員としての登録はおこなっていないし、これに関する規定を決めるのは部族

(7) 先住民族とカジノ産業との関わりについては野口(2019)を参照。

であるべきだ、という認識を明確に示す。苦難の道を歩んできた先住民族への差別は許されない、と強い口調でトランプを非難する彼女は、いっぽうで自分の家族史の真正性を主張し、動画を締めくくる。彼女が先住民族の人種アイデンティティの根拠として示したのは、家族史、そしてDNA鑑定のみであった。

5 先住民族からの反論

ウォーレンのDNA鑑定について、連邦政府に承認された3つのチェロキー部族政府は、それぞれ声明を発表し、その内容は三者三様だった (Collman, 2018)。ノース・カロライナ州のイースタン・バンド・オブ・チェロキー・インディアンズ (部族員登録人口約 13,000 人) の部族長は、ウォーレンはチェロキー部族員ではないと述べた。そのうえで、部族主権を尊重し、部族に寄り添う政策を実行してきた政治家として、彼女を支持する姿勢を明確に示したのである。これにたいして、部族員登録人口が約 30 万人にもなるオクラホマ州のチェロキー・ネーションは、DNA鑑定そのものが無意味であり、これを部族とのつながりを証明することに使用するの是不適切である、と強く非難した。オクラホマ州のユナイテッド・キトワ・バンド・オブ・チェロキー・インディアンズ (部族員登録人口約 14,300 人) は、DNA鑑定は部族員資格を証明するものではないが、ウォーレンの先住民族にたいする想いは受け止めるという、慎重、かつ穏やかな声明を発表した。

翌年の2月、チェロキー・ネーションの広報官であるジュリー・ハバードは、ウォーレンが部族政府にたいして謝罪したことを公表した。ハバードはこのとき、「私たちはこの対話を前向きに受け止めている。また、チェロキー・ネーションの部族員資格は、何世紀にもわたる文化と法によって定められており、DNA鑑定によるものではない」と述べた。謝罪を受け入れるいっぽうで、部族広報官として、DNA鑑定を人種規定に取り入れることには、反対する立場を示したのである (Krieg, 2019)。

約1年後の2月、チェロキー・ネーションに所属する4人の有志が、ウォーレン宛の公開書簡を公表した。この公開書簡は、DNA鑑定によって人種アイデンティティを決める風潮にたいして、先住民族の間に広がる危機感を反映している。公開書簡には、チェロキー3部族から143人、そのほかの部族に所属する先住民が75人ほど、賛同人として署名している。「先住民族がほとんど見えないこの国で、この論争からアメリカ人が導く結論は、これから先、長きにわたり先住民族の権利に影響を与える」という問題意識から、ウォーレンにたいして率直に、怒りと懸念を表明している。公開書簡は『ロサンゼルス・タイムズ』の報道を引用し、多くの白人がフェイクの部族を名乗ることによって、連邦政府がマイノリティに向けた事業契約を結び、8000万ドル以上を獲得していると指摘する。そしてフェイクの部族が論拠とするのが、家族史の物語と商業的なDNA鑑定である、というのだ (Pierce, Justice, Nagle, and Barnes, 2020)。平均的なアメリカ人は先住民について「人種」のカテゴリーであるとみているが、自分たちは政治的な集団であり、DNA鑑定による人種規定は、諸権利を脅かすものであるという主張だ。

厳しい言葉が並ぶ公開書簡は、謝罪からさらに一步踏み込み、ウォーレンにたいして以下の3点を確認するように促す。まず、彼女の家族史については「虚構」であり、「あなたと、あなたの先

祖は、白人だ」と断言する。次に、DNA 鑑定をチェロキー族のアイデンティティと結び付けたのは、誤りであるだけでなく、部族主権の根本を脅かす危険な行為だ、と非難している。最後に、部族員資格や親族関係がなく、先住民族の共同体から承認を受けていない状態で、チェロキー族としてのアイデンティティを主張することは、先住民族の自決権を軽視するものだ、と指摘する。これを踏まえて、誰が先住民で、誰がそうではないのか、これを決めるのは先住民族である、と訴えるのだ。

公開書簡を重く受け止めたウォーレンはその後、89の脚注をつけた11ページにわたる釈明文書を公表した(Warren, 2020)。ここで彼女は、チェロキー族有志が求めたように、自分は白人女性であり、先住民であると主張してきたことは間違いだった、とはっきり認めている。また、実質を伴わないアイデンティティを主張したことによる弊害があった、とも述べている。しかし彼女は、自分が先住民族のために、政治家としていかに努力してきたのか、またそれが先住民族の団体、複数の部族、そのリーダーたちにも高く評価されてきたことをアピールするのに、紙幅の大半を割いている。法学者による隙のない文書からは、みずからの政治生命を守るための戦略的な姿勢が垣間見えるのだ。ただ、DNA 鑑定まで持ち出して、自身の人種アイデンティティを証明しようとした行為、そしてその思考の非をはっきりと示したことは、彼女を厳しく批判していた先住民族の主張を、概ね認めたことを意味していた。

6 人種論争に内在する構造的暴力

ウォーレンの人種をめぐる論争にまつわる一連の流れからは、白人の特権を前提にしたRSによる先住民性の創出、背景に横たわるセトラー・コロニアリズムの構造、これに抗う先住民族の葛藤が浮かび上がってくる。第一に、エリザベス・ウォーレンの人種に関する主張と行動は、サーシ・スタームがあきらかにしたRSの系譜に連なるものである。家族に伝わる物語を根拠に、先住民族の子孫であることを主張するのは、スタームの研究によるRSの典型だ。ウォーレンが語る家族史からは、部族の共同体との具体的なつながりが見えてこない。つまりそれは一方的な語りであり、実在の先住民族の声や存在が不可視化されているのだ。また、彼女が公表した動画では、両親が差別に負けることなく結婚にいたったという美談が紹介される。これは、憎悪と分断を煽りつづけるトランプへの抵抗の意思を示しているのと同時に、スタームの研究があきらかにした、RSのあいだに顕著にみられる差別の歴史への抵抗のナラティブにも重なる⁽⁸⁾。

DNA 鑑定によって、先住民であることを証明しようとする行為は、セトラー・コロニアリズムの歴史に連なるものだ。先住民族のアイデンティティを、誰が、いかにして規定してきたのかを振

(8) こちらの分析においては、スタームの研究を重点的に参考にしたが、彼女自身は、メディアの取材にたいして、ウォーレンがRSであるという主張をしていない。彼女は電話インタビューで、「ウォーレンが、先住民、とくにチェロキーであると自称するのは、とてもオクラホマ的だ。オクラホマ州には、先住民の先祖を持つ、もしくは、自身が部族員であっても、白人に見える先住民がたくさんいる」と、ひかえめ、かつ慎重に答えるにとどめている(Wilkinson, 2019)。個々人の人種アイデンティティの定義や先住民性の真偽が、いかにデリケートな問題であるのかを、専門家として深く理解しているからこそその対応なのかもしれない。

り返ると、入植者とその子孫の主導のもとにあった連邦政府の政策が深く関わり、現代にまでその影響が引き継がれている。とくにDNA鑑定の結果によって先住民であることを証明するという方法は、中立的、もしくは客観的な「科学」に依拠するものと捉えられるいっぽうで、部族に根づいた文化、周囲の人びと、生き物、事物との関係性、これにもとづく経験を視野に入れていない。また、部族員資格に関する規定の策定を主体的におこなおうと苦闘してきた部族からすれば、セトラ・コロニアリズムによる支配構造を象徴するものと受け取るのは当然である。

ウォーレンは、DNA鑑定の結果を公表したときに、チェロキー3部族政府の見解や解釈を視野に入れていなかった。これは、たとえ意図的ではなかったにせよ、部族員資格を規定するために、それぞれ試行錯誤を繰り返してきた部族政府の主権を無視した、ということでもある。前述の人類学者、キム・トールベアーは、とくにこの点を強く非難している。彼女は2018年10月15日に、ツイッターで声明を公開した。そのなかで彼女は、セトラ・コロニアリズムを背景に、アメリカ人は「先住民族の全て、すなわち私たちの骨、血、土地、水、そして究極的には、私たちのアイデンティティにたいする権利を要求してきた」と述べ、ウォーレンによる主張を、収奪の歴史の文脈に位置づけている (TallBear, 2018)。

さらに彼女は、*High Country News* に寄稿した記事で、チェロキー・ネーションの部族政府が直接面会し、説明してほしいという要請に、ウォーレンが背を向けてきたということは、みずからが所属しているという共同体のなかで生きる人びとへのコミットメントや、関係を軽視していることの裏返しであると批判した。これこそが、ウォーレン自身がキンシップではなく、コロニアリズムそのものを選択した証拠だ、という主張には説得力がある (TallBear, 2019)。ここでトールベアーが述べるキンシップとは、先住民族が慈しんできた家族、親族、故郷の土地に根ざした生きとし生けるもの、さらには事物、スピリチュアルな存在との親密な関係性を意味している。

トールベアー、そしてチェロキー・ネーション出身の法学者スティーブ・ラッセルもまた、部族の共同体が、その人の存在を認めてはじめて、先住民としての属性が生まれると主張してきた (Russell, 2008; Zhang, 2018)。相互的に培われる対話とキンシップ、時空を超えて多方向に連なる関係性を通じたさまざまな経験から、先住民族としてのアイデンティティが生まれ、部族の共同体によって認知されていく。そうした双方向のプロセスこそが、重要な意味を持つのだ。

これは、チェロキー・ネーションの部族員で、メリーランド州に住むレベッカ・ネイグルによる、ウォーレンへの批判にも通底するものだ。彼女は、DNA鑑定論争が起こる前の2017年の時点で、ウォーレンが先住民族のリーダーたちとの面会を避けつづけているばかりか、2012年の民主党大会で、対話を求めてアプローチしたチェロキー族出身の女性との対話を拒否した、と指摘していた。ネイグルは、一般のアメリカ人が知る唯一のチェロキー族の人物が、エリザベス・ウォーレンになってしまう危険性を懸念し、「あまりにも腹立たしいのが、先住民である私たちが不可視化されているのにたいして、ウォーレンについてはそうではないということだ」と述べた (Nagle, 2017)。セトラ・コロニアリズムの歴史を生き抜き、アメリカ現代社会で実際に生活しているチェロキー族の人びと、すなわち当事者を抜きにして、チェロキー族といえば、ウォーレンばかりが目されることへの深い苛立ちである。

ただし前述したように、チェロキー3部族政府は異なる反応を示した。このことから、先住民

族のあいだにもコンセンサスがないことがわかる。そして、人種アイデンティティの規定とは、先住民族にとって重大な政治問題でもあり、それぞれの部族には個別の戦略と思惑があることも認識しておくべきだ。

たとえばチェロキー・ネーションは、ウォーレンの家系を徹底的に調べ上げたうえで、彼女はチェロキー族ではないという主張を発信しつづけた。いっぽうでノース・カロライナ州のイースタン・バンド・オブ・チェロキー・インディアンズは、ウォーレンを支持した。この部族は、支持表明の際に認めているように、テネシー州にある連邦政府管轄の史跡の土地を部族に返還する法律の成立に関して、ウォーレンから政治的なサポートを受けていた。この返還が実現したのは、2018年4月のことだ。ウォーレンにたいする対応の違いの背景には、こうした実利的、政治的な事情もあるように見受けられる。

複雑な思惑が交差するとはいえ、誰が先住民かという問いに答えるべきは、主権を有する先住民族であることにはかわりはない。先住民族の人種アイデンティティをめぐる、家族、氏族、部族、居留地をはじめとする先住民族の拠点やその周辺地域のレベル、州レベル、そして連邦レベルにいたるまでの多様な地理スケールで展開する議論は、極めて複雑だ。どのレベルにおいても、人びとの解釈や主張は一枚岩ではない。ただし先住民族からすれば、強奪されてきた、それでも守り抜いてきた諸権利、そして先住民族としての存続に関わる死活問題であることにはかわりはない。入植者の子孫であるウォーレンが、DNA鑑定にもとづき、自分はチェロキー族の子孫だと主張する行為は、生き残りをかけた先住民族による闘いの歴史に背を向けて、白人の特権を一方的に行行使すること、すなわちセトラー・コロニアリズムの実践を意味している。

おわりに

先住民族の人種アイデンティティの規定方法を定めるのは、主権を有する先住民族自身である、という主張には、セトラー・コロニアリズムの構造的暴力を受けつづけながらも、生き抜いてきた人びとが、自分たちの存在を未来につなげようとする決意がこめられている。彼らは、アメリカ史の文脈で定められてきた人種規定には、白人至上主義が内在していることを、時空を超えて、そして身をもって理解している。ウォーレンが実践しようとしたDNA鑑定による人種規定は、先住民族が主体的に育んできた文化や共同体の営みと、歴史的、地理的な観点から、さらには当事者性という問題意識からみても乖離している。また、DNA鑑定と自身の家族史をもって、チェロキー族のアイデンティティを正当化しようとした行為は、セトラー・コロニアリズムの国において、彼女が白人の特権を有しているからこそ可能だった。

言い換えるならば、ウォーレンは意図していなかったであろうが、DNA鑑定によって先住民族の人種アイデンティティを証明しようとする発想は、入植者による支配構造を前提にしていた。つまり彼女は、人種規定を決定する権利を含む主権、これに根ざした先住民性の回復を目指してきた、多くの部族の長年にわたる苦闘、セトラー・コロニアルな歴史空間で、見えない存在に追いやられてきた先住民族の生きざまそのものを軽視していたのだ。

先住民族の人種アイデンティティと先住民性について考えるとき、血筋やDNAのみならず、土

地、土地に根づく動植物、先祖やこれにまつわる記憶、事物やスピリチュアルな存在、今を生きる部族共同体との具体的なつながり、そして何よりも対話が求められている。このような対話を紡いでいくにあたり、「アイデンティティ」という個別な単位よりは、むしろ動的で、周りとの関係性を重視した概念が必要とされているのかもしれない。

筆者がキム・トールベアと対話を重ねながら執筆した、多種の正義と環境問題をテーマにした共著論文では、アイデンティティという言葉をあえて使わないかわりに、co-becoming (ともになっていく) という概念を中心にすえた (Ishiyama and TallBear, forthcoming)。これはもともと、研究対象である故郷の土地を筆頭著者とした、オーストラリアの先住民と地理学者などによる共同研究が提起した概念である (Bawaka Country et al., 2016)。人間を含む生きとし生けるもの、循環する生態系と対等の関係性を築いていくこと、ヒエラルキーにもとづく差別や格差の構造の解体と、環境問題との交差について考えるとき、従来のアイデンティティ・ポリティックスの議論の枠組みでは不十分だ。先住民研究の視座から生まれる、関係性を重視した思考は、人種論への応用の可能性を秘めている。

ウォーレンに反発した先住民が強調していたのは、共同体との具体的なつながり、そして相互関係だった。時代を超えて、故郷の土地を基点とした関係性のなかで生まれ、移りゆく変化の営みを捉えた co-becoming の概念は、大学や企業の実験室という特殊な空間で、個別に固定化されていく DNA 鑑定による人種規定とは、発想の根本を異にしている。相互的な関係性を紡いでいく思考からは、自身や、周りのありとあらゆる存在にたいする責任と連帯が生じる。連帯を基軸にした関係性からは、DNA 鑑定と、個別の家族史のみに依拠する、人種アイデンティティを主張する思考は生まれにくい。「ともになっていく」プロセスのなかで生まれる先住民性とは、受け継いできた土地、そして周りに存在する生命を愛し、ともに守り、ともに生き延びていく営みでもある。

(いしやま・のりこ 明治大学政治経済学部教授)

【謝辞】

本稿は、2019年6月2日、アメリカ学会第53回年次大会シンポジウム「人種」をめぐる論争を問い直す」でおこなった報告「アメリカ先住民と人種——エリザベス・ウォーレンのDNA論争を事例に」の内容に、大幅の加筆、修正をおこなったものである。貴重なコメントをくださったパネル参加者の皆様に、感謝申し上げます。

【引用文献】⁽⁹⁾

Abel, Sarah, 門田健一 (訳) 太田博樹 (監訳) (2019) 「DNA 祖先検査は人種差別主義者のイデオロギーの露を暴露できるか?」『人文學報』114: 33-71, https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/252453/1/114_33.pdf.

Barker, Joanne (2011) *Native Acts: Law, Recognition, and Cultural Authenticity*. Durham and London: Duke University Press.

———, ed. (2017) *Critically Sovereign: Indigenous Gender, Sexuality and Feminist Studies*. Durham and London: Duke University Press.

Bawaka Country, Sarah Wright, Sandie Suchet-Pearson, Kate Lloyd, Laklak Burarrwanga, Ritjilili

(9) ウェブサイトについては、2021年11月29日にアクセスを最終確認した。

- Ganambarr, Merrkiyawuy Ganambarr-Stubbs, Banbapuy Ganambarr, Djawundil Maymuru, and Jill Sweeney (2016) "Co-becoming Bawaka: Towards an emergent understanding of place/space." *Progress in Human Geography* 40-4: 455-475.
- Ben-zvi, Yael (2007) "Where did red go? Lewis Henry Morgan's evolutionary inheritance and U.S. racial imagination." *CR: The New Centennial Review* 7-2: 201-229.
- (2018) *Native Land Talk: Indigenous and Arrivant Rights Theories*. Hanover: Dartmouth College Press.
- Chavez, Nicole and Harmeet Kaur (2021) "Why the jump in the Native American may be one of the hardest to explain." *CNN*. August 19, <https://edition.cnn.com/2021/08/19/us/census-native-americans-rise-population/index.html>.
- Collman, Ashley (2018) "Eastern Band of Cherokee Indians chief voices support for Elizabeth Warren after she sparked controversy for taking a DNA test to prove her Native American ancestry." *Business Insider*. October 16, <https://www.businessinsider.com/richard-sneed-cherokee-chief-voices-support-for-elizabeth-warren-2018-10>.
- Corn silk, David (2015) "An open letter to defenders of Andrea Smith." *Indian Country Today*. July 11., <https://newsmaven.io/indiancountrytoday/archive/an-open-letter-to-defenders-of-andrea-smith-v-GFYv6jsU200EUt4SMJEA/>.
- Day, Iyko (2015) "Being or nothingness: Indigeneity, antiblackness, and settler colonial critique." *Critical Ethnic Studies* 1-2: 102-121.
- Deloria, Philip (1998) *Playing Indian*. New Haven: Yale University Press.
- Dunbar-Ortiz, Roxanne (2021) *Not "A Nation of Immigrants" : Settler Colonialism, White Supremacy, and a History of Erasure and Exclusion*. Boston: Beacon Press.
- Gates Jr., Henry Louis (2014) "High cheek bones and straight black hair." *The Roots*. December 29, <https://www.theroot.com/high-cheekbones-and-straight-black-hair-1790878167>.
- Glenn, Evelyn Nakano (2015) "Settler colonialism as structure: A framework for comparative studies of U.S. race and gender formation." *Sociology of Race and Ethnicity* 1-1: 54-74.
- Gonzales, Angela A. and Judy Kertész (2020) "Indigenous Identity, being, and belonging." *Contexts* 19-3: 28-33.
- Hundorf, Shari (2001) *Going Native: Indians in the American Cultural Imagination*. Ithaca: Cornell University Press.
- 石山徳子 (2016) 「アメリカ先住民研究とアイデンティティ・ポリティックス——チェロキー族を「演じる」研究者をめぐる論争を考える」『日本女子大学 英文学研究 白井洋子教授記念論文集』No.51, March: 85-98
- (2020) 『「犠牲区域」のアメリカ——先住民族と核開発』岩波書店
- Ishiyama, Noriko and Kim TallBear (forthcoming) "Nuclear waste, relational accountability, and settler colonialism in Indian Country." In Sophie Chao, Eben Kirksey, and Karin Bolender (eds.) *The Promise of Multispecies Justice*. Durham: Duke University Press.
- King, Tiffany Lethabo, Jenell Navarro, Andrea Smith, eds. (2020) *Otherwise Worlds: Against Settler Colonialism and Anti-Blackness*. Durham and London: Duke University Press.
- Krieg, Gregory (2019) "Elizabeth Warren apologized to Cherokee Nation over DNA test, tribe says." *CNN Politics*. February 1, <https://edition.cnn.com/2019/02/01/politics/elizabeth-warren-apology-to-cherokee-nation/index.html>.
- Leroux, Darryl (2019) *Distorted Descent: White Claims to Indigenous Identity*. Winnipeg: University of Manitoba Press.
- Linskey, Annie (2018a) "Ethnicity not a factor in Elizabeth Warren's rise in law." *Boston Globe*. September 1, <https://www.bostonglobe.com/news/nation/2018/09/01/did-claiming-native-american->

- heritage-actually-help-elizabeth-warren-get-ahead-but-com plicated/wUZZCrKKEOUv57I00K/story.html.
- (2018b) “Elizabeth Warren releases results of DNA test.” *Boston Globe*. October 15, <https://www.bostonglobe.com/news/politics/2018/10/15/warren-addresses-native-american-issue/YEUaGzsefB0gPBe2AbmSVO/story.html>.
- Linskey, Annie and Amy Gardner (2019) Elizabeth Warren apologizes for calling herself Native American. *The Washington Post*, https://www.washingtonpost.com/politics/elizabeth-warren-apologizes-for-calling-herself-native-american/2019/02/05/1627df76-2962-11e9-984d-9b8fba003e81_story.html.
- Nagle, Rebecca (2017) “I am a Cherokee woman. Elizabeth Warren is not.” *Think Progress*. November 30, <https://archive.thinkprogress.org/elizabeth-warren-is-not-chokeee-c1ec6c91b696/>.
- National Congress of American Indians (2021) “U.S. Census Bureau releases 2020 Census redistricting data and first look at AI/AN population data.” August 12, <https://www.ncai.org/news/articles/2021/08/12/u-s-census-bureau-releases-2020-census-redistricting-data-and-a-first-look-at-ai-an-population-data>.
- 西谷修 (2016) 『アメリカ——異形の制度空間』講談社選書メチエ
- 野口久美子 (2019) 『インディアンとカジノ——アメリカの光と影』ちくま新書
- Omi, Michael and Howard Winant (2015) *Racial Formation in the United States*. Third Edition. New York: Routledge.
- Pierce, Joseph M., Daniel Heath Justice, Rebecca Nagle, and Twila Barnes (2020) “Open letter to Elizabeth Warren from Cherokee Citizens.” March 3, <https://medium.com/@ewarrenisnotchokeee/open-letter-to-elizabeth-warren-from-chokeee-citizens-ab053578bd95>.
- Pulido, Laura (2018) “Geographies of race and ethnicity III: Settler colonialism and nonnative people of color.” *Progress in Human Geography* 42-2: 309-318.
- Roberts, Alaina E. (2021) *I've Been Here All the While: Black Freedom on Native Land*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Russell, Steve (2008) “When does ethnic fraud matter?” *Indian Country Today*. April 4, <https://indiancountrytoday.com/archive/russell-when-does-ethnic-fraud-matter>.
- Saldaña-Portillo, J. (2016) *Indian Given: Racial Geographies across Mexico and the United States*. Durham: Duke University Press.
- 佐藤円 (2005) 「インディアンと「人種」イデオロギー——チェロキー族の黒人奴隷制を事例に」川島正樹編『アメリカニズムと「人種」』名古屋大学出版会, pp.88-112
- Smith, Andrea (2012) “Indigeneity, settler colonialism, white supremacy.” In Daniel Martinez Hosang, Oneka LaBennett, and Laura Pulido (eds.) *Racial Formation in the Twenty First Century*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, pp.66-90.
- Sterm, Circe (2011) *Becoming Indian: The Struggle over Cherokee Identity in the Twenty-first Century*. Santa Fe: School for Advanced Research Press.
- TallBear, Kim (2013) *Native American DNA: Tribal Belonging and the False Promise of Genetic Science*. Minneapolis and London: University of Minnesota Press.
- (2015) “Genomic articulations of indigeneity.” In Stephanie Nahelani Teves, Andrea Smith, and Michelle H. Raheja (eds.) *Native Studies Keywords*. Tucson: The University of Arizona Press, pp.130-155.
- (2018) “Statement on Elizabeth Warren’s DNA test.” October 15. <https://twitter.com/kimtallbear/status/1051906470923493377>.
- (2019) “Elizabeth Warren’s claim to Cherokee ancestry is a form of violence.” *High Country News*. January 17, <https://www.hcn.org/issues/51.2/tribal-affairs-elizabeth-warrens-claim-to-chokeee>

ancestry-is-a-form-of-violence.

- Wang, Amy B. and Deanna Paul (2018) “Trump promised \$1 million to charity if Warren proved her Native American DNA. Now he’s waffling.” *The Washington Post*. October 15, <https://www.washingtonpost.com/politics/2018/10/15/trump-dared-elizabeth-warren-take-dna-test-prove-her-native-american-ancestry-now-what/>.
- Wang, Hansi Lo (2021) “The census has revealed a more multiracial U.S. One reason? Cheaper DNA tests.” *NPR*. August 28, <https://www.npr.org/2021/08/28/1030139666/2020-census-results-data-race-multiracial-dna-ancestry-test-mixed-biracial>.
- Warren, Elizabeth (2020) “Letter to concerned citizens of the Cherokee Nation, the United Keetoowah Band of Cherokee Indians, the Eastern Band of Cherokee Indians, and other Tribal Nations.” <https://www.indianz.com/News/2020/03/01/elizabethwarren022520.pdf>.
- Whelan, Julia (2021) “The Native scholar who wasn’t.” *The New York Times*. June 6, <https://www.nytimes.com/2021/05/25/magazine/chokeee-native-american-andrea-smith.html>.
- Wilderson III, Frank B. (2010) *Red, White & Black: Cinema and the Structure of U.S. Antagonism*. Durham and London: Duke University Press.
- Wilkinson, Francis (2019) “Elizabeth Warren and the high price of progress: No one cared when Bill Clinton claimed Cherokee ancestry.” *Bloomberg*. February 11, <https://www.bloomberg.com/opinion/articles/2019-02-10/elizabeth-warren-and-the-high-price-of-racial-progress>.
- Wolfe, Patrick (2006) “Settler colonialism and the elimination of the native.” *Journal of Genocide Research* 8-4: 387-409.
- , ed. (2016) *The Settler Complex: Recuperating Binarism in Colonial Studies*. Los Angeles: UCLA American Indian Studies Center.
- Zhang, Sarah (2018) “A man says his DNA test proves he’s black, and he’s suing: A case in Washington questions how the government defines race.” *The Atlantic*. September 19, <https://www.theatlantic.com/science/archive/2018/09/dna-test-race-lawsuit/570250/>.